

キウイフルーツの早期樹冠拡大のための整枝せん定方法

【要約】 キウイフルーツの早期樹冠拡大のためには、若木のうちに長大結果母枝を利用してせん定すると拡大速度が早く、果実品質は維持しながら早期収量確保が可能である。

園芸研究所・果樹部・落葉果樹研究室

連絡先

092-922-4111

部会名	園 芸	専 門	栽 培	対 象	果樹類	分類	普及
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----

【背景・ねらい】

キウイフルーツの安定生産のためには、樹面の有効利用は必須条件である。また、適切な枝の利用配置による早期の樹冠拡大は収量の向上につながる。そこで、早く樹冠拡大し、収量確保が行える整枝せん定法を確立する。

【成果の内容・特徴】

- ①キウイフルーツの整枝では、主枝延長枝として定植2年目より、長大結果母枝（100cm以上）を利用すると、慣行の結果母枝（60～100cm）を用いる場合に比べて樹冠拡大が早い（表1）。
- ②キウイフルーツのせん定において、長大結果母枝を主体に利用するせん定法と慣行の結果母枝を利用するせん定法を比較すると、単位面積当たりの結果母枝の密度（長さ）が同程度であれば、発芽率、新梢長に差は認められず、LAIも同程度となる（表2）。
- ③長大結果母枝を主体に利用するせん定法では、糖度、酸、硬度の果実品質には差は認められないが、果実重が大きくなり単位面積当たりの収量は多くなる（表3）。

【成果の活用面・留意点】

- ①キウイフルーツの早期成園化に活用できる。
- ②台風等で樹勢が低下した樹では、結果母枝はやや短めにせん定する。

[具体的データ]

表1 整枝法の違いと樹冠面積の年次変化 (平成1～5年)

試験区	H1	H2	H3	H4	H5
	m ²	m ²	m ²	m ²	m ²
長大母枝利用区	9.1	13.6	17.7	30.0	42.9
慣行母枝利用区	4.6	7.9	13.0	22.7	29.4

- 注) ①品種：ヘイワード、平成1年3月に1年生苗を定植。
 ②長大母枝利用区：100cm～200cmの母枝を利用。
 ③慣行母枝利用区：80cm前後の母枝を利用。

表2 せん定法の違いと新梢の生育 (平成5年)

試験区	平均母枝長	母枝密度	発芽率	新梢長	L A I
	cm	cm/m ²	%	cm	
長大母枝利用区	103	90.5	63.4	50.8	1.8
慣行母枝利用区	57	92.2	59.2	43.7	1.9
有意性			n.s	n.s	

- 注) ①L A Iは、プラントキャリブ-アナライザーを用いて8月31日に調査。
 ②n.s：有意差なし。

表3 せん定法の違いと果実品質及び収量 (平成5年)

試験区	果実品質				収量
	果重	糖度	酸	硬度	
	g	%	%	kg	kg/m ²
長大母枝利用区	84.6	13.9	1.60	28.7	1.37
慣行母枝利用区	72.6	13.5	1.57	27.6	0.94
有意性	*	n.s	n.s	n.s	*

- 注) ①果実調査：11月29日、糖度、酸は追熟後調査。
 ②n.s：有意差なし、*：5%水準で有意差あり。

[その他]

研究課題名：キウイフルーツの施設栽培

予算区分：経常

研究期間：平成5年度 (平成1～5年)

研究担当者：牛島孝策、林公彦、千々和浩幸、恒遠正彦、姫野周二、吉永文浩、鶴丈和

発表論文等：平成2、5年度果樹部試験成績書